

第四十二回 日蓮宗教学研究発表大会要旨

近代日蓮宗の動向(二)

—『縮刷遺文』編纂についての一考察—

安 中 尚 史

今日の日蓮聖人研究の基本資料である『昭和定本日蓮聖人遺文』の底本となった『縮刷遺文』（靈良閣版『日蓮聖人御遺文』）は明治三十五年、日蓮聖人立教開宗六百五十年を記念して刊行された。この事業は前年の明治三十四年十二月に発願され、当時の宗門の機関誌・教誌的な役割をはたしていた『日宗新報』の主筆で、その経営にも携わっていた加藤文雅が発願主となり企画された。彼は宗門の内外にその外護を求め「祖書普及期成会」という外護団体を組織し、遺文集の原版を調整するための資金集めに歩いていた。その時、堀之内山主武見日愨が御遺文集の編纂を計画していることを聞き、訪問して自らの計画を告げると同氏も快く賛同し協力を約束

され、この事業を一任した。

『縮刷遺文』は江戸く明治時代の在家居士小川泰堂校訂による『高祖遺文録』全三十巻を底本として編纂されたが、それが企画された理由は祖書の普及であった。『高祖遺文録』をはじめ既刊の御遺文集は頁数・巻数が膨大で携帯に不便であり、なおかつ価格が高く一般に普及していないため、また『高祖遺文録』は小川泰堂が苦心して校訂したにもかかわらず、誤りがあり、その訂正も含めて新たな御遺文集の発刊が企てられた。校訂作業については稲田海素を御真蹟対照主任に命じ全国に点在する御真蹟を廻ることになった。また『高祖遺文録』を毎月三巻づつ校訂することが予定され、小林日董、本間海解などが永年に渡って研究した成果による校本を参考書に使用して行われることになり、その任には主に風間淵静が就くことになった。そして実際に印刷する活字については、俗塵に汚れた物で聖典を製版することは恐れ多いという理由から、新たに買い求めた活字で印刷することとなった。

今回は、発願から祖書普及期成会の組織・校訂作業の準備段階までの様子を見てきたが、この事業は近代日蓮思想展開の上で大きな基礎を形成したものとと言える。しかも加藤文雅の他にも、当時武見日恕を中心とする御遺文編纂計画があったことは、あまり知られていなかった。この事業は当初わずか一年で完了する予定であったが、実際には足掛け三年の歳月を費やし明治三十七年八月に刊行され、非常に短期間の内に綿密な校訂作業まで行おうとしたため様々な問題が生じたことは十分に予想される。

この精力的に行われた大事業の苦心や意義が忘れられようとしている今日、さらにこれらの背景について今後とも考察を加えて行きたい。

上総七里法華地域における 十ヶ村題目講について

岩 田 諦 静

△一▽、ここである十ヶ村とは、日什上人門流の日泰

上人（一四三二—一五〇六）に帰依し、領内に法華宗改宗令を出した土気城主酒井定隆の居城のあった土気に隣接する村々のことである。私が縁有って入寺した、千葉市大木戸町の宝光山善徳寺において平成元年四月十日に十ヶ村題目講が開かれた。この題目講は現在六幅の御曼荼羅本尊を護持し、四月十日、七月十日、十一月十日の年三回の講を開いて、十ヶ村を三年一回の割合で循環している。その内の二幅は宝暦四年と享和三年のもので、あとは新しく明治以後のものであった。元文法難後まもない時期に形成されたと考えられるこの講の性格について二幅の本尊を手がかりとして以下に考えてみようと思う。

△二▽、この講が護持する六幅の本尊とは以下のものである。すなわち、(1)宝暦四年（一七五四）二月日。

妙満寺一〇一世、権僧正日瑞（本光院寿源日瑞）。南無日蓮日什大聖人と勧請。十ヶ村講中一結。(2)享和三年（一八〇三）正月二十八日。妙満寺一五八世日晃（惠照

〔性〕院是妙日晃）。善勝寺二十七世。南無日蓮大菩薩、

南無日什大聖師、日義日仁日運と勧請。上総国市原郡山辺郡、捨箇村構中一結。(3)明治八年五月日。妙満寺権少教正日馨（二百四十九世、幸安院日馨）。十ヶ村萬人構